

## 絵本「三びきのやぎのがらがらどん」の基礎的研究

前 田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年10月28日受付、2022年12月7日受理)

### 要 旨

幼児に絵本を読み聞かせるには、(1) 絵本を幼児と同じようにまず絵から見ていき、絵から読み取れる様子・気持ち・世界観をまざまざととらえた上で、そこに加えられた文章から読み取れることを重層的に積み重ねていく必要があること、(2) 次に、実際に幼児に読み聞かせる場を想定して、1 ページごと、もしくは見開きの2 ページごとにその時点ですばやくどんなふうに描かれており、どんな文で言い表されているかを思い出し、確認して、幼児の方に向けて、自分の言葉で語っていくという二つの研究方向がある。両者はいつもそろっていなければならないわけではないが、両輪のごとくにそろっておけば、それだけ心強く思え、安心して読み聞かせができるのである。とは言え、読み聞かせは生き物であり、いつまでも覚えておくことはできないため、読み返しが不可欠になってくる。それだけに、読み聞かせをする教師・保育者の生涯にわたる読み手としての人間的成長を必然的に要請するものである。本稿では、ノルウェーの昔話「三びきのやぎのがらがらどん」(マーシャ・ブラウン絵、瀬田貞二訳、福音館書店、1965〈昭和40〉年7月1日発行、2020年12月5日第175刷、32ページ)を取り上げて、(1) の絵本の読み聞かせの基礎的な研究に取り組んだものである。

キーワード: 「三びきのやぎのがらがらどん」 ノルウェー民話 絵本の読み聞かせ 登場人物の心 主題

### はじめに—本研究の目的・方法、資料—

本研究の目的は、幼児の絵本理解の過程に即して「三びきのやぎのがらがらどん」の主題を明らかにすることである。主題という言葉もあいまいであるが、この絵本全体を貫くものに迫りたいということである。方法としては、表紙→見返し→標題紙→本文→裏見返し→裏表紙と順に読んでいくが、絵から文章へという幼児の絵本の理解の筋道を守り、がらがらどんたちの考えたことの追究を主軸として丁寧に読んでいき、最後に以上のことを踏まえて主題に迫ることとする。ただし、最初の表紙からいって、主題ははじめから明示されており、本文は主題が確かに主題であることを確かめることになっているのではないとも見られよう。それゆえ、表紙や本文を解明する際にも、主題にふれることはためらわないようにしたい。

#### 一 がらがらどんの心を追究する前に—表紙・裏表紙・見返し・標題紙による土台固め

##### 1 表紙、及び裏表紙から考えられること

三匹のやぎが、いずれも橋を渡りながら嬉しそうにとびはねている。ここに喜び勇んでいるのが題にある「三びきのやぎのがらがらどん」なのであろう。橋は大木を切って渡しているようで、かげになっているところがほとんどで、黒々としていて頑丈なのだろうが、それでも三匹が乗り、調子を合わせて同じ向きの後ろ足ではねてもいるためか、ずいぶんたわんでいる。それで誰もそのことについては心配はしていない。ただ、よく見ると、とびはねてはいても、後ろ足はしっかり橋げたにくっついている。見た目には大胆にふるまっているように見えても、決して羽目は外していない。橋の高さは左手の崖の方が低く、右側の崖の方がいくらか高くなっている。左から右へと小さいやぎのがらがらどんから中くらいのやぎのがらがらどん、大きいやぎのがらがらどんと順に並んでいる。おそらくこの順に進もうとしているのであろう。小さいやぎのがらがらどんはまだ頭に角がなく、あごひげもちょろっと生えているにとどまる。しかし、中くらいのやぎになると角はまっすぐに伸びただけであるがかなりの長さがあり、真正面からぶつかると思われ、眉間が割れそうである。あごひげも相当増え、腹やしっぽの影も濃くなり出す。大きいやぎとなると、角も長くねじ曲がり、輪まで作って何倍にも伸びている。あごひげも貫禄を増し、体も太くなり、体毛も一段と伸び、存在感をき

わだたせている。つわものらしい風貌・身なりになってくるのである。歴戦の勇士と言うのか、ここまで生き抜いてきたあかしが剛毛に現れている。そのことを念頭に置いて改めて小さいやぎを見ると、二匹を同僚として横目で眺める余裕があり、決して引け目を感じていない。ここに流れているのは姿形は違っていても、一緒に生き抜いていこうとする連帯感である。したがって、小さいやぎの存在感も決して小さくないのである。橋から下には、岩だらけで白い波しぶきが立っている。V字谷と言うのか、U字谷と言うのか。落ちてしまえば、もう命はあるまいと思われる。これまで大まかに「北欧民話」としていたのを新しい版では「ノルウェーの昔話」と絞ったのも、もともとこういう自然の厳しい特定の国でしか生まれなかった昔話ということなのであろう。

なお、この光景には、背景は描かれず、三びきのやぎのがらがらどんがきわだたせられている。その一方で、右左に黄色を包み込んだ黄緑が、幾分黒みを帯びながらも三匹のやぎたちを囲んでいるように見えることも見逃せない。

裏表紙を見ると、この黄色ががらがらどんたちの目指す草のいっぱいある希望の山を象徴したものであり、目の前には空まで届くかと思われるような針葉樹が立ちはだかつている。日の光に輝く草に覆われた山ははるかで、直面するのは針葉樹の森。これが現実であり、目指すのは、表紙のように山に至る橋を見つけ、困難を克服して、草を存分に食べられる喜びにとびはねられるようになること。しかし、その境地に至るまでには当然目の前に立ちはだかる困難を乗り越えなければならない。そこで、以下の物語が、必然的に繰り広げられることになるわけである。

したがって、表紙はこの橋を挿し絵のように喜んでみんなで渡れるといいなあという、三匹のやぎの共通の願いが描かれ、裏表紙には針葉樹林の先に見える理想の日の輝く山が描かれている。

## 2 見返しにおいて

山が四つ。左手に高くそびえながらも手前まで広がる山の全貌が描かれる。その山は流れの早いところから手前のゆるやかになったところまで、川筋がずっと見え、蛇行しながら続いている。この山と並ぶようにして、中央と右手奥に二つの山が、少し高い、低いということがあっても峰をなしている。この二つの間にもかなり蛇行した川があり、右手前に見える小山の両脇に分かれて海に向かっていく。以上のような黄色い四つの山は低いところは、針葉樹の木々に覆われ、谷はフィヨルドで削られて険しくなっている。その中を14匹のやぎが至るところにいて野山を駆け回っている。左手の山では、山の頂上までのぼって、この山を極めたような表情をしているやぎもいる。急坂を駆け下りる大胆なやぎもいる。中腹でその姿を見上げておもしろがり、何か語りかけているやぎもいる。どの目も、この険しい自然を我が物にしている自信がみなぎっている。川の流れはフィヨルドになっているところでは確かに厳しかろうが、川下の流れがゆるやかになったところでは、川の近くまで下りていって、水を飲むやぎもいたようである。中央の山では草を口にはおぼって目をつぶりうっとりしているやぎもいれば、急な傾斜を勢いよく駆け上る猛者もいる。遊んでいるのか、他のやぎと角突き合わせるやぎたちもいる。右手奥の山はこの全景を捉えた地点から遠いのか、頂上近くで右の方に駆けて遊ぶやぎしか描かれていないが、手前の小山には似たような場所で反対側に駆けて遊ぶやぎもいる。また、頂上に近づいてほっとするやぎ、のどかに下るやぎもおり、お互いのくつろいだ様子に親しみのまなざしを向けるやぎも見られる。あろうことか、もともと山のない空にまで2匹のやぎがえがかれている。おかしい絵なのだが、それに何の違和感もないほどである。どこもかしこも、やぎでいっぱい山々。まさにノルウェーらしい見返しと言えよう。ただし、この絵には橋がない。橋がなければ、やぎはそれぞれのいる山を出ることは難しい。とすると、この話は、やぎが近い草場は食べつくして、新しい草場を開拓しなければならなくなった時どうしたかという開拓者物語にもなっている。

なお、丈のすこぶる高い針葉樹の木々におおわれた、寒さも容赦のない自然環境であろう。ただし、何本かの大きな木のみデザインのように描かれている。結局、森を抜けなければ、山の頂近くにはいけないということを感じさせれば、役目は果たしているようである。

したがって、見返しからうかがえるのは、やぎたちのどんなところでもたくましく生きる生命力である。

### 3 標題紙等をめぐって

次は標題紙となるはずであるが、標題紙（2-3ページ）の前に、1ページ取っていて、手前に数カ所とがっていない岩が突き出ているなかを川が流れている。向こう岸には水に近いところにいる針葉樹の木立が見える。しかし、せいぜい10本近くと限られており、背もあまり高くない。その背後に黄色いお日様が輝き、山のなだらかな稜線も黄色に包まれている。おひさまにも花のつぼみが開く形が浮かび上がってきており、また山の中腹にも2本草花が映っている。川で遮られた向こうの日差しの温かさや山肌に見える草花の兆しは、やぎたちの向こうの山に行ってみたいと言う願いをかきたてたことであろう。

続いて見開き一面に描かれた標題紙には三匹のやぎのがらがらどんが、望みどおり、存分に大きくなった草を口にくわえ、食べているところが描かれている。どのやぎの目にも大きな達成感が伴っている。小さなやぎのがらがらどんは、むしった草ばかりか、花までくわえていて、うれしそうである。耳がまっすぐに中くらいのやぎ、もしくは大きいやぎのがらがらどんに向かって立っている。「計画通りにうまくいったね。」という目を中くらいのやぎに向けている。上目づかいの目には、本当にみんな山の高いところの草場に来て、こんなにあふれるほどの草を口にすることができているんだねという歓喜の思いがにじみ出ている。小さいやぎのがらがらどんの胴体は右手前で見えないが、小さいやぎと向かい合う中くらいのやぎと大きいやぎの横へのほりぐあいをもとに眺めると、確かに驚くほどしっかり肉がついている。体が二倍にも三倍にもなっている気がしてくる。そこから翻って小さいやぎのがらがらどんはどうなっているのかを推測すれば、小さいなりににはち切れんばかりに太っているのであろう。この肉は、出産に授乳に、やぎ族の繁栄へとつながっていくのである。本人たちの食欲を満たす喜びは、当然そこにとどまってははいないのである。

中くらいのやぎのがらがらどんの様子を見ると、角がたいそう立派で長く、とがり方も絶妙である。目はどこから見られてもいいように光を放っている。耳は一方は見事に立ち、もう一方は格好良く斜めに広がっている。口にくわえる草の量も均衡を保つものにとどめている。体は牛に近いほど肉がついている。

大きなやぎのがらがらどんは、中くらいのやぎの伸びきった角が曲がって、さらにうねって伸びている。突き刺されるよりももっと大きな破壊力がありそうである。背も一段と高く、存在感があり過ぎてこわいほどである。耳はほとんど横に生えている。こうなると、精悍さを感じさせるものになっている。目は落ち着きをたたえているが、まつげと合わせて羽のようにも見える。顔も大きく、口にくわえている草の大きさ・量も桁違いである。

なお、標題の前には「アスビョルンセンとモーのノルウェーの昔話」とある。原作の共著者の名前をこの挙げて調べたい人には手がかりを提供しているのであろう。

4ページ目は献辞となっていて、「アン・キャロル・ムアとトロルに捧げる」とある。本文の中ではトロルは粉々になる運命なのであるが、そのことに対する胸の痛みは、マーシャ・ブラウンにはあるようで、ここに名まえを挙げて感謝の思いを伝えている。5ページ目に小さいやぎのがらがらどんが草を食べながら飛び跳ねようとしている絵も載せてある。この小さいやぎのがらがらどんのはずむ思いが角が少し伸び、左耳が立ち右耳が後ろにそる格好の良さで自然に大きく見え始め自分でも成長を自覚し、目をつぶって有頂天になっているところのようである。このがらがらどんの体は黄色に包まれていて幸せの絶頂にあるかに見える。この絵も、トロルの犠牲なくしては得られなかった光景なのである。このページも、謝辞の延長にあるものであろう。ここまでが、広義の標題紙に属するものと言えよう。ずいぶん丁寧な導入がなされている。後の本文を凝縮して仕上げる足場を作ったと言えよう。

改めてまとめれば、標題紙の前の絵は、やぎたちが行ってみたい日差しの降り注ぐ山の草場、標題紙は、やぎたちが実際にしてみたい思いきり草をむしゃむしゃ食べて、太られる状態、標題紙の後が小さいやぎの夢に見る境地、もしくは食べることを介しての小さいやぎの成長する喜びが描かれたものになろう。

## 二 三匹のがらがらどんの心を追究する

### 1 向こうの山にある草場に行こうとして、渡る橋を見つけようとして山に登る

ここまではほとんど絵に触発されて考えてきたが、これからはいよいよ文章が入ってくる。

物語の最初は、見開き一面の手前の左にある山にがらがらどんたちが登ってきたところから始まる。実際



には、左のページ（6ページ）の下半分をがらがらどんたちが占める。大・中・小のがらがらどんがほとんど並ぶようにして山道を登ってきたようである。大きいやぎと小さいやぎが白く、中くらいのやぎが茶色いというくらいの違いだけで、まだ個性の違いも見いだせない。ただ、三匹の目は一様に川を隔てた向こうの山（7ページ）に注がれている。そこは1ページにあったように、日光が降り注ぎ、草が育っていることが遠くからでも歴然としているところなのである。ただし、そこに行くまでには山と山との間に湾曲した川があり、けわしいフィヨルドがあり、針葉樹が視界を遮っている（6ページと7ページの間に）のである。三匹の目が途中の障壁にくもらず、光に満ちた向こうの山を見上げているのが何よりの救いであろう。この場面は、トロルをやっつけて、目指す山に登り、しっかり食べながら顔を見合わせた時の光景なのであろう。この場面の本文は、以下のとおりである。

- ①むかし、三びきのやぎがいました。②なまえは、どれもがらがらどんといました。  
③あるとき、やまのくさばでふとろうと、やまへのぼっていききました。

〈考察〉語られている時点でもう「むかし」となっていることである。ここには、自ずと説話的な要素が入り込むことになる。三匹のやぎは、当然、ノルウェーのどこかに住んでいたのであろう。ただし、名前を紹介する以前に、①のように「三びきのやぎ」として挙げるのは異例であり、その名前も②のように同じとなると、そのようなつけ方をしたゆえんがあろう。親子か、兄弟・姉妹かもしれない。あるいは、血のつながりがない仲間・同志であつてもかまわない。聞き手はこうした思いを持ちながら、以後のお話を聞くことになるわけである。

③を読むと、ねらいは、川を渡って、向こうの「やまの」森を抜けた高地の「くさば」に行つて、草をいっぱい食べて「ふと」ること。なぜ、こちらの「やまへのぼってい」ったのかもには触れていないが、おそらく以下のような事情だったのであろう。今登っている山にも、向こうの山にも、足元には森林が広がっており、間にはかなりの広さの川が流れている。向こうの山に行きたいということについては共通の憧れが見られる。こちらの山にも草は生えているが、この程度の草では、食べつくしてもたいして太れないと見切っているのであろう。この三匹はこの手前の山に住んでおり、この山の草の生育状況についてはしっかり了解し合っていたようである。そして、向こうの山にある草場にしかない草花を目にすると、もう行くしかないという気持ちになつていよう。こちらの「やまへのぼってい」く時点から、川は広く、流れが急で、水は冷たく、泳いで渡ることはできないと知悉しており、はじめからこちらの山から向こうの山にわたる橋を探していたようである。この山に登ったのは、向こうの山に行くためだったのである。

## 2 橋はあったが、その下には恐ろしいトロルが住んでいることに気づく

前の見開き一面（6-7ページ）と基本的構図は似ているが、広さもあり流れも速い谷川の上に、がっしりした橋がかかり、向こうの山の中腹までしっかり貫いている（8-9ページ）。そして、その下に橋と頭を接するようにトロルの大きな顔がはっきり見える。目も鼻もあきれる程に大きく、存在感がある。体全体が大きいようだが、口からは顔がどこまであり、胴体がどうなっているのか、はっきりしない。体は茶色い毛でおおわれているようだが、足元は人間のように出ており、つめもある。両膝を両手で抱えているようで、山男に近いが、人間の体のように区切れているのかどうか分らないところが不気味である。岩山に囲まれた一角にいるのだが、もともとそこは崖になっているところであるから、どうやってへばりついているのか不思議である。トロルの背後には針葉樹の木々も並び、いかめしさもある。ただし、誰かに会うまでは眠っていたらしく、片目をやっとなげたところであり、まだぼんやりしているところでもあったようである。それゆえ、幼児にとっては、怖さも半分、おかしさも半分という状態であろう。

それを見つめるがらがらどんたちは、やっとな橋が見つかったという嬉しさ（中くらいやぎ）もあり、やっとなトロルがいたか、さすがに何の障害もないというはずはないよなあという思い（大きいやぎ）もある。小さいやぎは心配になつたらしく、二匹の顔色をうかがっている。

この見開き一面（8-9ページ）につけられた本文は、以下のようである。

④のぼるとちゅうのたにがわにはしがあって、そこをわたらなければなりません。⑤はしのしたには、きみのわるいおおきなトロールがすんでいました。⑥ぐりぐりめだまはさらのよう、つきでたはなはひかきぼうのようでした。

〈考察〉④で、登る途中の谷川に橋が架かっていたのは予測していたとおりでよかったが、向こうの山にある草場にたどり着くと言う至上命題があるからこそ、この橋を渡らなければならなくなるのである。⑤では、橋がついているすぐ下（岩だらけの崖の一角）には、トロールがこちらの山から登ってきても歴然とわかるように、気味の悪い巨大な姿を見せけている。⑥は、トロールのぐりぐり目玉はあきれるほどの皿のように大きく、こっそり通ろうとしても必ず見つかるのに決まっており、突き出た鼻はひかきぼうのように長く、近くに行けば引っ張り込まれそうな恐怖感をおおっていたというのであろう。

ここで小さいやぎは「ねえどうする？」と言う顔を二匹に向けている。三匹はどのような密談をするだろうか。仮に一例を作っておく。（大・中・小は、それぞれ大きなやぎ・中くらいのやぎ・小さいやぎの略称である。）

大「三匹が一斉にトロールというのは無理だな。」

小「どうして？」

大「ぼくら三匹が一度に橋の上に立っても橋が壊れないという保証がないからさ。その上、トロールの重さまで加わるとすると、どれほどの重さになることか。途方もない重量がかかることだけはまちがいあるまい。」

小「言われてみれば、その通りだね。ぼくらは一匹ずつしか渡りようがないんだね。」

大「また、大きい方からというのもまずい。」

小「どうして？」

大「運よく僕がトロールに勝ったら、君たち二匹も渡れるけれど、負けたら、後の二匹も行けなくなる。ぼくをやっつけたトロールに立ち向かう気力が湧くかい？」

小「それはそうだね。三匹とも大丈夫か、三匹とも草場に行けないままかという、危ない選択はできないね。」

大「とすると、小さいやぎのがらがらどんから行くしかないが。どうやって草場まで行ける？」

小「後からずっと大きいやぎが来るから、ちびの僕は食べないでくださいって言い逃れるのは？」

大「トロールが一瞬どちらにしようかと迷うすきに逃げるんだね。」

中「ぼくもそうしよう。『もうすぐもっと大きいやぎが来ます。』と言って、だまそう。ね、いいでしょう。」

大「もちろん、かまわない。結局、僕が勝てば三匹とも向こうの山にある草場に行けるし、やられても二匹は生き延びられるもんね。」

本筋としてはこのようなことが話し合われたことであろう。したがって、以下の場面は、三匹にとってはすべて打ち合わせ済みのことだったのである。

※元々の橋は、当然必要があって人間が作ったのであろう、そうだとすると、トロールは、後のページ以降に、「俺の橋と言っているが、実際には森や岩山に宿る精霊で、橋ができたのをこれ幸いとして、通ろうとする生き物を脅したり、食べたりして生きてきたようである。トロールの言葉は、容易にうのみににはできないのである。

### 3 小さいやぎが渡り始める

いよいよ計画が実行段階に入る。10-11ページになると、小さいやぎのがらがらどんに焦点が当たっているため、橋の両端は全く見えない。がらがらどんは、長く続く木の橋を、どんどんわたっている。見開き一面の画面の中でも半分よりはるか先の方まで勢よく進んでいる。目はきちんと前を見すえており、トロールが橋の上に姿を現すのではないかなど、びくつく要素は微塵もない。顔もしっかり上がっており、口元には笑みさえ浮かべていそうである。

ここでも、本文を引用しておく。

⑦さてはじめに、いちばんちいさいやぎのがらがらどんがはしをわたりにやってきました。⑧かたこと

かたことと、はしになりました。

〈考察〉⑦の最初が「さて」で始まることについて、立ち止まって考えておきたい。「さて」は、「接続詞。上を受けて下に移る時の語。また、局面を変えて説き起こす時の用語。」(『広辞苑』)だから、前場面から幾分時間が経過しているかもしれない。初めての局面ではあろうが、がらがらどんグループとしていつも頭と体の力を合わせて協力し、威力を発揮してきたのであれば、案外短時間で済んでいるかもしれない。今までにもこうやって幾多の困難を乗り越えてきたたくましさ、ここでも存分に発揮されるのである。もしそうだとすると、ここではなぜ「さて」を用いたのであろうか。おそらく、がらがらどんにとっては「さて」は不要であろうが、前場面からのがらがらどんの大いなる変貌に読者がついて行くための間を与える「さて」ではなかろうか。この文では一番小さいやぎのがらがらどんは、トロルのいる方に近づくために橋を渡りにやってきたのである。⑧では、「かたことかたこと」と橋が鳴るほど軽い、その足音は乱れることはない。なぜであろうか。小さいながら、このがらがらどんは、自分が何をすればよいかわかり、確かな見通しがあつてかたことかたこと歩いているのである。音はかすかであるが、不安は全くない。むしろ、よけいに軽快に進んでいく足取りなのである。

#### 4 トロルと言ひ合いになる

次の見開き一面(12-13ページ)になると、今度はトロルの側から橋を渡る小さいやぎが眺められる。谷川の向かい側にぎょろぎょろした目をつくと見開き、鼻が天狗のように長く上向き、歯が黒くとがったトロルの顔が右手前で大写しにされ、鼻先にかかった橋に小きながらがらがらどんがおり、トロルを見返す構図になっている。トロルの顔は画面の半ばを占めるほど巨大で、ぐりぐり目玉も突き出た鼻も歯のとがった口も、怖がらせるには有効であろうが、冷静に見ようとしているものには、それほど威力を発揮しないかもしれない。さらに、位置関係に注目すれば、両者の関係は違ったものにも見えて来る。トロルは橋の下に住んでいるため、周りは岩に取り囲まれ、針葉樹の木々にも覆われ、谷川の波立つ音も身近なのであるが、橋を渡ってくるがらがらどんは橋の上におり、トロルが見上げる、がらがらどんが見下ろすようになるのである。そして、橋の上においてわざわざトロルに近づいて、四肢をふんばり、トロルをあえて見下ろそうとする気構えには、自分を恐れさせようとする敵の実力や知恵をどこまでも見極めようとする負けん気を感じさせずにはおかぬものがある。とりわけ、目が怖がってはいないことを証明している。しっぽも立て、四肢も小さいながら、トロルがほんとうにのみこもうとするなら、歯向かう姿勢をうかがわせている。体は小さくても、中くらいのやぎや大きいやぎに負けない闘志をみなぎらせているのである。

本文では以下のように記されている。

⑨「だれだ、おれのはしをかたことさせるのは。」と、トロルがどなりました。

⑩「なに、ぼくですよ。いちばんちびやぎのがらがらどんです。やまへふとりにいくところです。」と、そのやぎはとてもちいさいこえでいいました。

⑪「ようし、きさまをひとのみにしてやろう。」と、トロルがいいました。

〈考察〉⑨では、つい「おれのはし」と言ってしまうほど、この橋を渡らせるか否かについては、絶対の権限を行使してきたようである。「どな」っていうのも、相手を怖がらせようと思つてである。⑩では、「なに、ぼくですよ。」と、トロルのペースに巻き込まれまいとして、わざわざ平然とした口ぶりで話そうとしている。続く「いちばんちびやぎのがらがらどんです。」という宣言も、臆することなく事実としてみとめている。「やまへふとりにいくところ」という目的も、包み隠さずに明言する。「ちいさいこえ」ではあつても、言うべきことはきちんと答えているのである。⑪では、トロルが「きさまをひとのみにしてやろう。」と言いだす。自分の大きな口なら、一口ではいつてしまうので、上から目線で「ひとのみにしてやろう。(おれさまがしてやるのだから、ありがたいうことをきかないといけないぞ。)」と言っているわけである。相手がトロルを恐れて、何も抵抗しないようになれば、たしかにひとのみにできそうである。次の場面において対立が頂

点に達することを予感させるところとなっている。

#### 5 小さいやぎは危機を脱する

続く見開きの一面(14—15ページ)は、山も、谷川も、橋さえも出てこない。もう明らかに、ちびやぎとトロルとの一対一の対決場面である。左上に小さいやぎの体全体がどかっと大きく描かれ、対照的に右下に貫禄のあるトロルのぎょう目と堂々たる太い鼻が描かれ、両者は一步も引かずに見合っている。命にかかわる真剣勝負がこの瞬間に繰り広げられているのである。

前場面でも、小さなやぎのがらがらどんの本気さは、伝わっていたが、本場面ではさらに実際の大きさ以上にきわだたせられる。耳も一方は横に、他方は上にすることで小さいやぎの存在自体が大きく見えるように精いっぱい空間に広げてみせている。角も生えかけてこれからの成長を感じさせる。目も丸く見開いてトロルをどこまでも見続けようとしている。鼻筋も通っており、口も決して小さくない。太ろうとしている最中にはやぎの胴体にはしっかり身はついていし、四肢は前場面で予感されたように、ここでも足場を踏みしめている。首も決して細くはない。そして、目は、大きく見開いて、トロルの一挙一動を何も見逃さないと言わんばかりに、トロルの目を見据えている。トロル自身もトロルのぎょう目を眉毛かまつ毛で覆い、むき出しにならないようにトロルなりに格好良くにらんでいる。それであっても、小さいやぎは、トロルとのにらみ合いで、決して譲らないという決意を示しているのだから。

本文を引用しておく。

「⑫ああ どうかたべないでください。⑬ぼくはこんなにちいさいんだもの。」と、やぎはいいました。「⑭すこしまてば、二ばんめやぎのがらがらどんがやってきます。⑮ぼくよりずっとおおきいですよ。」

「⑯そんなら とつとといつてしまえ！」と、トロルはいいました。

〈考察〉「⑫ああ どうかたべないでください。」という口調は、小さいゆえに下手に出ているのであろう。しかし、⑬の食べないでほしいとお願いする理由が、「ぼくはこんなにちいさいんだもの。」なのである。見での通り、こんなに小さいゆえに、食べてもあなたのような大きな体の持ち主には、腹の足しにはならないですよと言ひ張るのである。そして、⑭・⑮の文では、間をおかずに、じきに次のやぎがこの橋にやってくることを、この二ばんめやぎは、僕よりはるかに大きいと、そちらのやぎを食べた方がいいことを暗に勧める。⑯は、「そう言うのなら、そうしよう。お前には用がなくなったから、とつとと行ってしまえ。」というのである。(ア) このやぎが小さいのは事実であり、たいして腹の足しにならないと本人から示唆されれば、あるいはそうかもしれないと思えたのであろう。(イ) また、次に来る二番目やぎの方がぐんと大きいといわれれば、すでに戦う場面をすつとばして食べる時を思い浮かべ、それは確かに小さなやぎとは比べようがないほど食べがいがあると思えたのであろう。(ウ) そして、無理にこのやぎを食べようとすれば、決して容易には食べさせないぞというやぎの気構えとも真正面からぶつからざるを得なくなるのである。トロルが一步譲って、一匹のやぎが向こうの山の草場に行ける道はやつと開き始めたのである。

#### 6 二番目やぎが橋を渡り始める

次の見開き一面(16—17ページ)では、橋の色に一番近い茶色い二番目やぎが橋を渡っているところが描かれている。まなざしが少し下を向き、いくらかぶつきらぼうになってくる。小さいやぎが少し上に向かざるを得なかったのとは、対照的である。胸を張っているため、まっすぐに後ろに伸びた二本の角も真横に並べた耳も、立派な髭も丸太のような首も、胴体を包む長い毛並みも、高く上がった尾も、敏捷そうな体つきも足さばきも、どこか威厳を感じさせる。橋は、小さいやぎの時は緩やかな婉曲であったが、今回は直線的な屈曲になっている。ぐんと重くなっているのだから。橋げたが谷川の流れにもかなり近づいているようにも見える絵になっている。

本文は、下記のようなものである。



⑰しばらくして、二ばんめやぎのがらがらどんがはしをわたりにやってきました。⑱がたごとがたとと、はしになりました。

〈考察〉⑰の文にどうして「しばらくして」二番目やぎが橋を渡りにやって来るのであろうか。おそらく小さいやぎが「すこしまてば」やってくると言い置いたため、トロルが中くらいのやぎを待っており、小さいやぎが安全に向こうの山の草場に近づく時間にしたのであろう。小さいやぎのがらがらどんがトロルにとどめられずに通れたことが幸いだったと気づかれぬように、かえって当然のようにゆっくり間を取ったこともあったかもしれない。かくて、トロルの頭から小さいやぎの姿が自ずと消え、中くらいのやぎの一挙一投足に集中することになろう。すると、⑱の文のように「がたごとがたと」と聞こえてくるのである。足音も格段に存在感を高めている。挿し絵を見直すと、歩き方に橋をそのままわたっていきそうな迫力がある。

#### 7 トロルと二ばんめやぎの対決

続く見開き一面(18-19ページ)は、橋げたが大写しになり、トロルがあわてて体を橋げたの上に上がろうとして中くらいのやぎと面と向かって言い争うところである。ここでは、トロルは初めてぐりぐりめだまをむき出しにし、黒黒とした鼻を二ばんめやぎに向け、手足を橋にかけて、今にも襲うぞと言う雰囲気醸し出している。ただし、口の丸く空いているのは、相手への威嚇か、それとも相手の予想外の力強さに焦っているのか。橋の横には大岩もあり、トロルの体の色や顔の色と似ていて、見分けがつかないほどである。周りには針葉樹が自然に囲んでいる。ところが、二ばんめやぎは、トロルと真正面から視線をぶつけ合うが半白眼で、どこかに相手を冷笑しているような表情が抜けない。前足の片方をはねあげているのも、今の時点では、思い切り駆ければ、トロルが橋の上に挙がってくるよりも早く、トロルの脇を抜けられると考えているかもしれない。ただ、後ろ足を見ると、トロルが急にとびかかってきても大丈夫なような身構えもできそうである。硬軟両方の対応が可能なのであろう。

本文は、以下のように記されている。

「⑲だれだ、おれのはしをがたとさせるのは。」と、トロルがどなりました。

「⑳ぼくは 二ばんめやぎのがらがらどん。㉑やまへふとりにいくところだ。」と、そのやぎはいいました。㉒まえのやぎほどちいさいこえではありません。

「㉓ようし、きさまをひとのみにしてやるぞ。」と、トロルがいいました。

〈考察〉⑲の「だれだ、おれのはしをがたとさせるのは。」以下の文は、ことばは小さいやぎのがらがらどんに向けてどなったのと同じ形式であるが、「がたと」は当然音が大きく、この橋を自分のものと見なしているトロルには、不快感も増大する。橋の沈み具合も格段に違うため、怒りの度合いも激しくなる。それに対して、このやぎは、小さいやぎのように一旦自分に注目させようとして、「なに、ぼくですよ。」とわざわざ断ったりもせずに、淡々と「ぼくは二ばんめやぎのがらがらどん。」というばかり。「いちばんちびやぎ」と大きさを説明しようともせず、「二ばんめやぎ」と、わかり切った順番と名前を事務的に伝えるのみである。文末を省略したもの、トロルには敬体を使うことさえしなかったからのようである。㉑の文では、小さいやぎとは違って、「やまへふとりにいくところだ。」と高慢に言い放つ。語り手も、この会話に続く地の文で「と、そのやぎはいいました。」のように、客観的にその場面を見ているものの解説にとどまっている。ただ、㉒の文「まえのやぎほどちいさいこえではありません。」とあるように、言い方が常体に変わるばかりか、声の太さも違うことは言及している。当然、発言の重みも比べようがないほど段違いになってくる。

㉓の「ようし、きさまをひとのみにしてやるぞ。」というのは、二ばんめやぎへの宣戦布告の気持ちで、こう口に出している。小さなやぎには「ようし、きさまをひとのみにしてやろう。」とまだ余裕があり、上から目線で言っていたが、ここでは自ずと決意表明になっている。橋の上に上がり、これだけ大きく、角の長い二番目やぎをほんとうに一飲みのできるだろうか、もしできるにしても、骨が折れるだろうなあという



思いも出て来、覚悟する思いも湧いて来ていよう。

#### 8 二ばんめやぎも逃げおおせる

前の場面が続いて、二番目やぎとトロルとの一触即発の一瞬があったに違いない。しかし、次の見開き一面（20-21ページ）になると、右手に新たに見えてきた山裾にたどりついた二番目やぎが、会心の思いで、左側手前の橋の脇で恨めしそうに見ているトロルを見返している。二番目やぎのがらがらどんは、まだ後ろ足を長く伸ばしたままで、今ここにたどり着いたという様子をうかがわせている。あごにも、少し開いた口にも嬉しさが溢れている。目には自信に満ちた鼻高々な気持ちがはっきり表されている。橋げたが尽きたところとはまだ二、三メートルも離れてはいまい。しかし、もう両者の勝負には結果が出てしまったのである。

他方、岩肌そのもののようなトロルの図体はでかくはあるものの、二ばんめやぎのがらがらどんが橋を駆け抜ける方が速かったようで、ぐりぐり目玉は恨めしそうに二番目やぎの方を見ている。鼻がまっすぐに落ちているのも、岩肌をした怪物ゆえかもしれない。自らを橋の上に上げようと力を注ぐと、鼻を火かき棒のようにどんと真横まで突き出すことまではできなかった（そこまでは鼻を横に突き出すことに集中できないし、短時間では間に合わなかった）のである。

この見開きの本文は、以下のようにになっている。

「②④おっと たべないでおくれよ。②⑤すこしまてば、おおきいやぎのがらがらどんがやってくる。②⑥ぼくよりずっとおおきいよ。」

「②⑦そうか、そんならとつときえうせろ。」と、トロルがいました。

〈考察〉②④の「おっと」は、「事の急な時、驚いた時の声。気づいた時の声。」（広辞苑）であるから、トロルがやぎを食べようと何か仕掛けたのであろう。それで、たべられるかどうかのひやっとするところがあったのを何とか切り抜けて、それでもまだ余裕がある様子で、トロルの思い違いをを叱るような言い方をしている。そして、②⑤・②⑥文では、トロルの相手は二番目やぎの僕ではなかったと言わんばかりに、後に大きいやぎのがらがらどんがやってくる、僕よりずっと大きいことを強調し、本来トロルの相手は、自分よりずっと大きいがらがらどんだったのだと思わせようとしている。実際に、二番目やぎのがらがらどんがトロルの手のうちになくなった以上、もう相手を変更するしか方法はないのである。②⑦文でも、トロルはまだ今さっき逃したやぎにまだ未練が残っているようで、その当人に指摘されて、トロルもこうなると、もう大きなやぎに標的を変えなければならないことがわかってくる。そうなると、まだ視界に入る二ばんめやぎは、意識を変えようとするトロルにとって目ざわり以外の何物でもなくなってくる。それで、「そんならとつときえうせろ。」と言う。どうせつかまらないうのなら、目障りな存在はいなくなってもらった方がいいのである。それで、二番目やぎのがらがらどんも、安心してこちらの山の草場に登っていける状態になったわけである。

#### 9 間をおかずに大きなやぎのがらがらどんが橋を渡って来る

トロルにとっては、二番目やぎとの決着が前場面でやっと着いたところなのに、次の見開き（22-23ページ）では、もう大きいやぎのがらがらどんに橋の上からにらみつけられ、下手に動くときびかかれそうな場面に急展開する。大きなやぎのがらがらどんは、綱のように引き絞られた橋の上にどかっとなら描かれている。目の強さを中心にして、どこもかしこもすきがない。全身が一つになって攻撃する体勢をとっている。一触即発あれば、もう爆発せずにはおかないという意気込みである。一回ぐりと曲がって突き出た角の先はとがり、胴体は精悍そのものである。わけでも、蹄（ひづめ）の張り方は百戦錬磨の構えでいつでもとびだせる力に満ちている。橋は大きいやぎのがらがらどんの重みでほとんど綱のように引き締まっている。谷川もすぐ下まで迫っているように見える。

他方、トロルも右手下半分を使って大きく描かれている。構図上、両者は重なり合わんばかりに対峙しているが、トロルの体勢は大きいやぎのがらがらどんの迫力に気おされてか、少しあおむけ気味になり、後ず

さりしそうになっている。これでは全く相手を攻撃するところではない。自らどう守るかも考える余裕もなく、ただただ大きいやぎのすぐにでもやっつけるぞという戦う姿勢にたじたとされているのである。

この場面の本文は、次のようになっている。

㉘ところがそのとき、もうやってきたのがおおきいやぎのがらがらどん。㉙がたん、ごとな、がたん、ごとな、がたん、ごとな、がたん、ごとんと、はしになりました。㉚あんまりおもいので、はしがきしんだりうなったりしたのです。

㉛「いったいぜんたいなものだ、おれのはしをがたびしさせるやつは。」と、トロルがどくなりました。

〈考察〉㉘の文は、二番目やぎが『しばらくして』やって来たのとは逆に、「ところがそのとき」で始まり、大きいやぎのがらがらどんがもうやってきたという。それも主語と述語を入れ替えて、「もうやってきたのが おおきいやぎのがらがらどん。」と連体止めにしている。目の前に大きいやぎのがらがらどんがどんと現れ出たような印象が湧く。二番目やぎが去って、トロルに間を与えず、続いてやって来る。明らかにトロルに戦いの準備をさせまいとして、どこまでも計算ずくでやっているのである。㉙の文では、「がたん、ごとな」を読点を打って、しかも四回続けて、その圧倒的な迫力を伝えている。明らかにトロルを威嚇している。㉚これまで「かたことかたこと」や「がたごとがたごと」では、なぜそのような音が出るのかの説明はなかったが、「がたん、ごとな」となると、どうしてもその理由を説明しなければ済むまいと思えてか、「あんまりやぎがおもいので、はしがきしんだりうなったりしたのです。」と加えている。がらがらどんに応援する幼児は、大きいやぎのがらがらどんの重さがひどくあることを聞いて、これはかなり期待できるとうれしくもなろう。

ただし、トロルの驚きには激しいものがあつたようで、㉛では、「いったいぜんたいなものだ、おれのはしをがたびしさせるやつは。」と驚きを隠さずに聞いている。とは言え、もう「おれのはし」などと言っておれる状況ではないのに、これまで長い間そう思い込んでいた言葉が、つい口に出てしまうのであろう。まだ、「どな」るくせもやめていない。どなることが、自らの動揺を敵にさらすことになるだけだ、自身をよけいに追いつめていくことにもなりかねないのだという判断はできていない。

#### 10 大きいやぎのがらがらどんであるとトロルの前で名のる

前の場面でトロルに「おれのはしをがたびしさせるやつ」が誰かを聞かれて、ここでは名のるところである。画面(24-25ページ) いっぱいに一歩足を踏み出し、首を突き出した大きいやぎの顔が、斜め下から大写しに映し出される。こうして改めて眺めると、確かに圧倒的な迫力がある。角もここまで太くて曲がりくねっているのを見ると、誰も近づけないのではと思えてくる。頭にあるもじゃもじゃの毛も、がっしりしたあごも、声を出している口も堂々としていて見とれるほどである。そして、何よりも半開きの目に自信があふれており、これならいくらトロルでもやっつけることができる気がしてくる。景色も何も書かれず、ただ青色に塗られている。少し下から見上げる形になるトロルの目(前場面23ページ参照。)には、空を背景にして大きなやぎの顔がこの通りに浮かび上がっていたのではないかとも思われる。

本文は、以下のように添えられている。

「㉜おれだ！㉝おおきいやぎのがらがらどんだ。」と、やぎはいいました。㉞それはひどくしゃがれたがらがらごえでした。

〈考察〉㉜・㉝の会話文のみ、大きな活字で書いている。実際にどんな声の大きさだったか、どのくらい迫力があつたかを幼児にも目で見てわかるようにしたものである。地の文では、もう指示語も説明もなく、「やぎはいいました。」とある。これだけ存在感のある姿を示した以上、「やぎ」といえば、大きなやぎのがらがらどんに決まっているのである。㉞の「ひどくしゃがれたこえ」は、地を震わせるような恐ろしい声に聞こえたであろう。聞き手にしてみれば頼もしい限りであるが、トロルの方がかわいそうにも思えてくる。

## 11 大きいやぎとトロルとの口合戦

続く場面（26-27ページ）では、小さいやぎ、二番目やぎには、一飲みにすると言い放っていたトロルと、ほんとうに戦うしかないと覚悟して臨んだ大きいやぎとの対照的な姿が映し出される。この見開き一面においても大きいやぎの体は中央の線を越えるまで画面いっぱいを占め、闘志は一段と燃え盛っている。絵本では判然としないが、大きいがらどんの頭はおそらくトロルにまっすぐに向けられ、闘牛のように前足をはねあげている。走って相手に体当たりする準備であろう。今にも走り出さんばかりに構えている。頭は角を備えており、ぶつかる破壊力を発揮しそうである。鼻息も荒く、線まで見えるほどである。胴体も頭から一直線になっており、この戦う姿勢に勝てるものがあるとは思えないほどである。

それに対して、右端にいるトロルは、23ページであおむけ気味になっていた体勢を立て直し、きちんと直立してみせたのであるが、ぐりぐり目玉には驚きの表情が消えず、口も唾然としたところが残っている。ひかきぼうのような長い鼻はまだ大きいやぎに向いているが、これがトロルの戦闘姿勢かと問い直してみると、首をかしげざるを得ないところが出てくる。実際に手は広げて、トロルなりに何とか迎え撃とうとしているのであろう。とは言え、このとてつもなく大きくて敢闘精神に満ちた存在をどうやってやっつけようとしているのかという方針は見えてこない。せいぜい受けとめようとするのが精いっぱいであったのだろう。

本文を引用する。

③⑤「ようし、それではひとのみにしてくれるぞ！」と、トロルがどなりました。

「③⑥さあこい！③⑦こっちにや二ほんのやりがある。③⑧これでめだまはでんがくざし。③⑨おまけに、おおきないしも二つある。④⑩にくもほねもこなごなにふみくなくぞ。」

〈考察〉③⑤でも、やぎたちの反応がどうであっても、「ようし」という言葉は、変わっていない。しかし、二番目やぎには、「きさまをひとのみにしてやるぞ。」と言っていたのに、大きいやぎには、「それではひとのみにしてくれるぞ！」と言い直している。相手にしてやるというよりも、動作をしてくれると言った方が相手を出さず、トロル自身の心の動揺を抑えられると考えたのであろうか。それにしても、トロルはこれほど大きくて強力な相手に対しても、同じような言い方をやめていない。ほんとうに一飲みにすることは、絵でトロルの口と大きいやぎのからだ全体を見比べる限り到底不可能であり、蛇のように口が大きくなならない限り、かみつくこともできまい。たまたまトロルという名前の未知数なことが恐ろしさを醸し出すだけなのである。

それに対して、大きいやぎは、五文を畳みかけて、トロルの戦闘意欲をなくそうとする。③⑥の「さあこい！」は、トロルが「それではひとのみにしてくれるぞ！」と言って仕掛けて来そうなので、売り言葉に買い言葉として発したものの。③⑦・③⑧の「こっちにや二ほんのやりがある。これでめだまはでんがくざし。」は、やぎの太くて曲がった角を二本の槍に見立てて、攻撃する手段としては強力であることをまず印象づける。そして、その角がトロルのぐりぐり目玉にぶつかったとき、目の表面が傷つくことだけでは済まないことを、目玉が丸いという連想を生かして田楽刺しにしてやると、挑発したものである。③⑨・④⑩はどこに大きな石が二つあるのか、わからない。それでも、こういう言葉による先制攻撃も、ほんとうに肉も骨もこなごなにされそうで、トロルの獲物と戦おうとする気力を削いだことであろう。大きな石がなかったとしても、これはこれで相手の気力をなくすことで、成果を挙げたのである。

## 12 トロルにとびかかって、予告通り退治する

前場面に引き続いて、見開き一面（28-29ページ）の橋の上で、トロルと大きいやぎのがらどんととの戦いが勃発する。両者の重みも相当なもので、橋も川面に着きそうなほどたわんでいる。ただし、どう見ても大きいやぎの独り舞台で、トロルの活躍する場が少しでもあったという気がしない。大きいやぎは体をまっすぐにして手足をせわしく動かしている。声も張り上げているようで、切り裂かれたトロルの体の一部らしきものが、宙を舞っている。ほとんど服の切れはしか肉体の塊なのかも見分けがつかないが、毛の生えた手や腕のような断片もあり、谷川にもトロルの足なのか、突き出た岩なのか迷うものがある。周りの波し

ぶぎでやはりトロルのかけらなのだろうと推測される程度である。できるだけ生々しくないように心がけながらも、嘘っぽくならないようにも苦心して、この決闘の場面を再現したのであろう。

この見開きの本文は、下記の通りである。

④「こう、おおきいやぎがいました。⑤そして トロルにとびかかると、つのでめだまをくしぎしに、ひずめでにくもほねもこっぱみじんにして、トロルをたにがわへつきおとしました。

〈考察〉④の「こう」は、二本の角で目玉を田楽刺しに、持って来た石で肉も骨も踏み砕くことである。以上は、大きいやぎが「ひとのみにしてくれるぞ!」と言ったトロルに対抗して、負けじと言い放った言葉であったが、⑤は実際にしたことである。ほとんど放言にも聞こえたが、大きいやぎはトロルにとびかかると、一つ目の「つのでめだまをくしぎしに」することはその通りに実現し、二つ目の石の代わりにひずめで、肉も骨も木っ端みじんにし、結果としてトロルを橋から谷川へと突き落としたというのである。大きな石を持っているというのは、トロルを恐れさせるための出まかせであったかもしれないが、実際には自らのひずめで「にくもほねもこなごなにふみくだく」ことを成し遂げたのである。しかも、残骸を橋の上に置き去りにしたりせず、トロルの何もかもをきれいさっぱりと「たにがわへつきおとした」という徹底ぶりである。

この場面が最も激しい戦闘場面であるが、ここまで砕かれてしまうと、かえって惨酷さをこの一面に閉じこめて終わらせることができよう。この話では、命をかけても橋を渡り、草場に行こうと出発点で決意した以上、どこかで戦うほかなく、どちらかが倒れるというところまで行くしかなかったのである。

### 13 安心して連れ立って草場のある山へ

新しい見開き一面(30-31ページ)は、がらっと変わって三匹のやぎが顔を見合わせて笑顔になり、「さらに高い草場に向かって歩もうとしている。大きいやぎのがらがらどんは、いまやっと追いついたところらしく、まだ走り終えていない。それに対して、二ばんめやぎは、首だけ後ろを向いてよかったねという表情である。君ならきつと勝てると信じていたと言いそうな、わかりあっている間同士の親しみのあるまなざしをしている。今追いついた大きなやぎも、ほとんど同じような目をしている。ただし、二番目やぎと大きなやぎとの交流をさらに上から見ている小さいやぎの表情がわからない。うれしくてしょうがないのは当然としても、腹の方が見えるようにとびあがっている。その証拠に草の生えているところに一、二カ所小さいやぎの影ができています。笑えて笑えて仕方がなくなっているのでしょうか。前足二本と後ろ足二本同士の動きはあっているのですが、両者がばらばらの動きをしているようにも見えてくる。

この山の中腹か裾野かの光景はどこで見られたのであろうか。大きいやぎは、やっとな針葉樹の林を通り抜けたところのようである。その針葉樹林体のさらに下側はと探してみると、画面の左下に、岩の多い谷川があり、こじんまりした橋もかかっている。ここで激しい戦いがあつたことがまるでうそのように、穏やかな状態に戻っている。トロルを叩く鎮魂の場面にもなっているかのようである。

ここでの本文は、次の一文である。

⑥それからやまへのぼっていきました。

〈考察〉⑥の一文の主語は、何であらうか。この場面を見ると、三匹が合流するため、つい三匹のやぎのがらがらどんはと考えそうである。もう一度、きちんと補うと、「それから、三びきは特に約束していたわけではありませんが、針葉樹林を出たところで落ち合つてやまへのぼっていきました。」ということになろう。それとも、実際に特別な主語を与えていないことに着目して、やはり前場面から大きいやぎが活躍していることを受けて、「それから大きいやぎのがらがらどんは針葉樹林を出たところに待っていた小さいやぎ、二ばんめやぎとともにやまへのぼっていきました。」と見なすべきであらうか。絵本であることに着目すれば前者になり、文章としての一貫性に注目すれば後者になるのであろう。小さいやぎとは二番目やぎとは大きいやぎの勝利を確信しており、大きいやぎがトロルを突き落とし、跡が残らないように片づけると知ってい



ただけに、大きいやぎとトロルとの戦いを自分たちの目や耳で見届けることはしなかったと推測したが、その方が、以後草場で食べることに専念できたであろう。

#### 14 三匹とも草場でしっかり太る

本文の終わりは半面（32ページ）のみである。標題紙の絵に近いが、あれほど美しくはない。三匹のやぎのがらがらどんが、現実には山の草場に行つてどれくらい太ったかを一目みてわかるようにしたものであろう。ここまで可視化すると、どのやぎも大した違いはない。どのやぎも限界に近いほど食べ尽くしているようで、もう四本の足で支えるのが難しいほど太っている。しかも、まだ誰もが食べるのをやめていない。確かにこれ以上食べると、体が維持できなくなりそうである。ただし、まだ、目の鋭さはなくなっておらず、これだけ太っても、まだ一旦事があればすぐにでも協力し合う関係が復活しそうである。

本文は、以下の四文である。

④「やぎたちはとてもふとって、うちへあるいてかえるのもやつのこと。⑤もしもあぶらがぬけてなければ、まだふとっているはずですよ。⑥そこで――

チョコキン、パチン、ストン。

⑦はなしはおしまい。

〈考察〉④「とてもふとって」は、もともとやぎたちは精悍と言えるほどの引き締まった肉はついていたが、行きたかった山の草場で、もうこれ以上は太れないというくらい太つてということであろう。また、「うちへあるいてかえるのもやつのこと。」を読むと、これほど太つていても、もうトロルはいないため、安心して橋を渡つてうちへ帰つたようだと推察できるわけである。⑤の文は、よく言われることのようにだが、わからない。やぎたちは、生命維持に重要な脂（あぶら）が抜けるというような非常のことがなければ、皆さんがお話を聞いている時点でも太っている（幸せな状態は続いている）はずだとして、この物語の現実性・真実性を保証しているのであろうか。⑥・⑦の文は、結末をつけるために、「チョコキン」と話しを切る、「パチン」は手を叩いて終わりにする、「ストン」は落として終わる言葉なのであろう。それを三つ重ねて、聞き手に終わりを予感させ、紙芝居などで言う決まり文句の「はなしはおしまい。」を出して、本当に結ぶことになろう。

### 三 本作品の主題を想定し、構成と照応していることを確かめる

#### 1 主題の仮説

以上のような考察を踏まえれば、主題は、同じがらがらどんという名前を持つ三匹のやぎが橋の下に住むトロルという未知の生物に対して、あらゆる可能性を想定し、最も犠牲を少なくして、最大の利益が得られるようにそれぞれの役割を果たし、向こうの山にある草場まで行き、結果的に誰もが太つて帰ることを成し遂げた一体感の力になろう。

表紙は、三匹のやぎのがらがらどんがこんなふうに喜んで橋と一緒にわたることができたらいいなあという心の底で抱いた願いを可視化したものであり、見返しは、ノルウェーという山とフィヨルドに囲まれたきわめて厳しい自然環境のなかで、どんなところでも、どんなふうにも生き抜くやぎのたくましい生命力が伝わってくる。実際には、これらのやぎは北国ノルウェーの人々の思いを体現した存在なのであろう。

標題紙の前（1ページ）に描かれた谷川と針葉樹林の木立の先に見える温かい日差しが降り注ぐ山肌はやぎたちの行ってみたい草場の心象風景のようである。また、標題紙（2-3ページ）には、やぎたちが現実に行きたい思いきり草をむしゃむしゃ食べている顔を見合つて喜びを共有したいという思いを大きく映し出したものであろう。表紙が橋をどう渡るかに着目して、願っていることを表したのに対して、ここでは、光の十分ある山の草場でどんなことを実現したいかを描いている。こちらの方が、直接的・究極的であることは言うまでもない。そして、標題紙の後（5ページ）には、小さいやぎが草を口に含みながらも目をつむって飛び跳ねる絵は、まだ小さいだけに大きくなることに湧く成長の喜びを語ったものになろうか。

この後、本文が続ぎ、また見返しがあって、北国ノルウェーに住むやぎたちの空中でも活躍しそうなたくましい生命力を改めて見直し、終わりに背の高い針葉樹林のはるか向こうに見える日の光に輝く高い山を見て、三匹のやぎのがらがらどんが作り上げた希望実現の物語を懐かしく思い浮かべることで結ぶことになる。

## 2 本文の構成の確認による検証

- (1) 場の設定…6－9ページの部分である。昔、三匹ともがらがらどんという名前のやぎが向こうの山にある草場で太ろうとして手前の山へ登ってきた。途中に橋があり、渡るほかないが、橋の下に気味の悪いトロルが住み、どうすれば犠牲をできる限り少なくして渡ることができるか考えざるを得なくなる。
- (2) 一番小さいやぎはかたことかたことと橋を鳴らしただけであったが、ひるまずにトロルと堂々とわたりあい、自分のとても小さいこと、次に来る二番目やぎはずっと大きいことを説いて、橋を渡ることに成功する。(10－15ページ)
- (3) トロルをじらせるように間を空けて二番目やぎががたごとがたと橋を騒がしく鳴らし、言葉も対等のような口ぶりで食べようとするトロルをあしらい、後から来る獲物はもっとはるかに大きいと説き、自分への執着を諦めさせる。(16－21ページ)
- (4) 今度は間をおかずにがたん、ごん、がたん、ごん、がたん橋をきしらせて大きいやぎのがらがらどんが登場し、声の迫力でも戦う姿勢でも口による先制攻撃でも勢いを見せつける。そして、現実にとびかかり、先に言っていた通りに角で目玉をくしぎしに、石の代わりにひずめで、肉も骨もこっぴみじんにして、トロルを谷川に突き落とす。(22－29ページ)
- (5) 針葉樹林を出たところで三匹のやぎはおちあい、顔を見合わせて計画がみのり、無事に山の草場に行けることを喜び合う。山の草場で食べられるだけ食べつくし、歩いて帰るのもやっとなこと、脂が抜けていなければまだ太っているはずだとして、物語を結ぶ。(30－32ページ)

構成をこのようにとらえると、最初の場の設定から小さいやぎの小さいことを武器にしての難局脱出→二ばんめやぎのあしらい→トロルの体勢が整わない時点で大きいやぎが登場し、勝利を不動のものにするまで、活躍する存在は違っても、見事な連携がとられていることが判明してくる。最後に、誰も欠けることなく再会でき、三匹とも山の草場で存分に食べられ、太ることができたのも、当然だと思えるものになっている。この三匹の一体感こそがこの作品の魅力であることが再確認できるわけである。仮説は検証できたと言えよう。

## **A Study of a picture book “Three sheep, Garagaradon”**

Shinsyo MAEDA

Advanced Course of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the thema.